

令和2年度教育課程研究集会

小学校 共通 新学習指導要領に対応した学習評価

奈良県教育委員会事務局学校教育課

本日の内容

- 1、学習評価の基本的な考え方
- 2、学習評価の基本構造
- 3、各教科等の学習評価
- 4、観点別学習状況の評価と評定
- 5、学習評価を行う上での各学校における留意事項



国立教育政策研究所

指導資料・事例集よりダウンロードすることができます。

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>

1、学習評価の基本的な考え方

2 学習評価の充実

学習評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

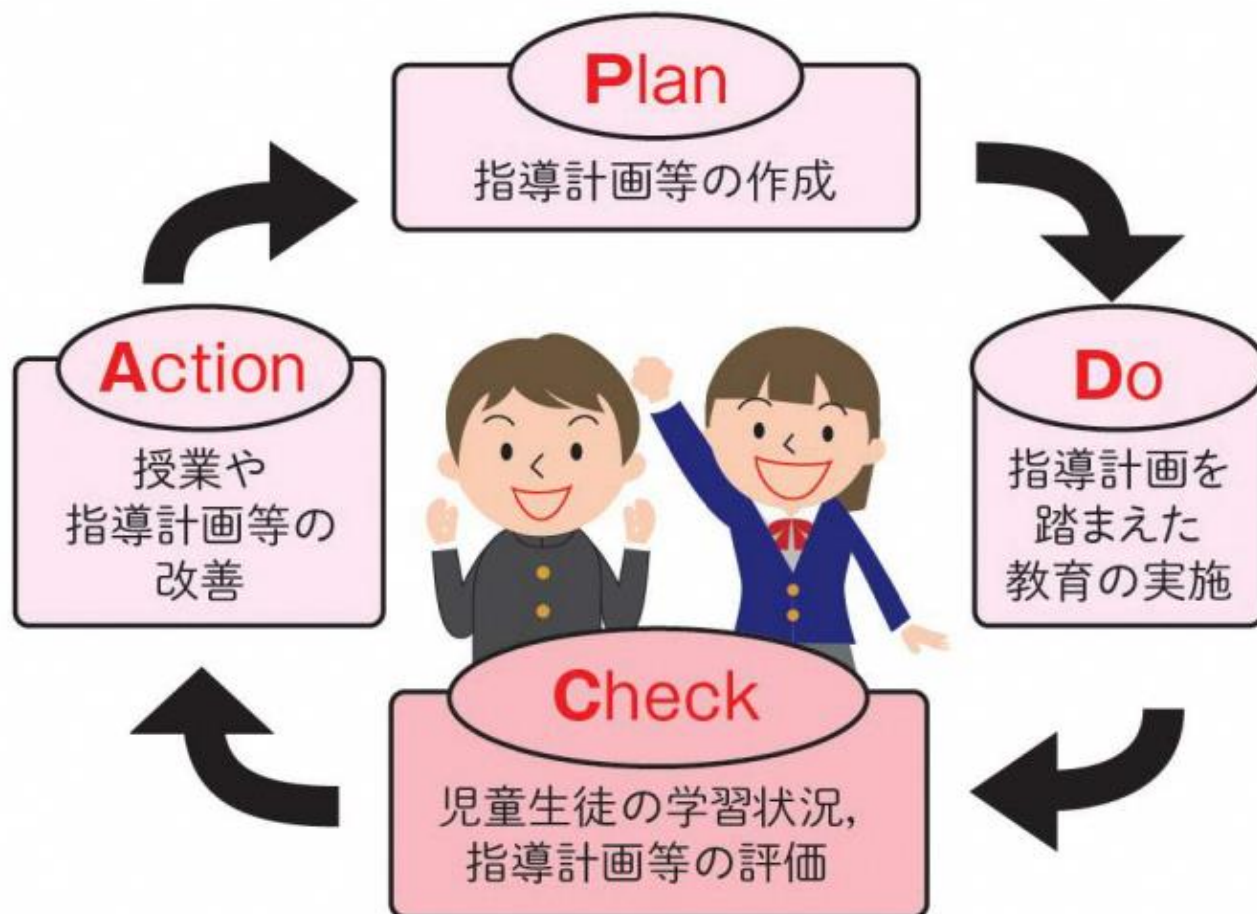
小学校学習指導要領（平成29年告示）第1章 第3の2の（1）

学習評価：学校における教育活動に関し、児童の学習状況を評価するもの

「児童にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。

1、学習評価の基本的な考え方

カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価、
「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と評価



1、学習評価の基本的な考え方

学習評価の改善の基本的な方向性

- ✓ 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ✓ 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ✓ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

次の授業では
〇〇を重点的に
指導しよう。



〇〇のところは
もっと～した方が
よいですね。



2、学習評価の基本構造

新学習指導要領の趣旨

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「**社会に開かれた教育課程**」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

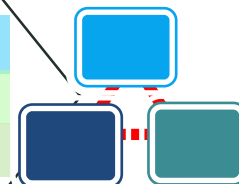
どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



※高校教育については、些末な事実的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

2、学習評価の基本構造

育成すべき資質・能力の三つの柱

学習する児童の視点に立ち、育成を目指す資質・能力の要素を三つの柱で整理。

学びに向かう力、人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を
総合的にとらえて構造化

何を理解しているか
何ができるか

知識及び技能

理解していること・できる
ことをどう使うか

思考力、判断力、表現力等

2、学習評価の基本構造

観点別学習状況の評価の観点の整理

資質・能力の三つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえて、観点別学習状況の評価の観点については、小・中・高等学校の各教科等を通じて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到に整理された。

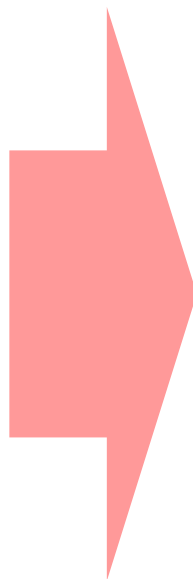
〈平成20年改訂〉

関心・意欲・態度

思考・判断・表現

技能

知識・理解



〈平成29年改訂〉

知識・技能

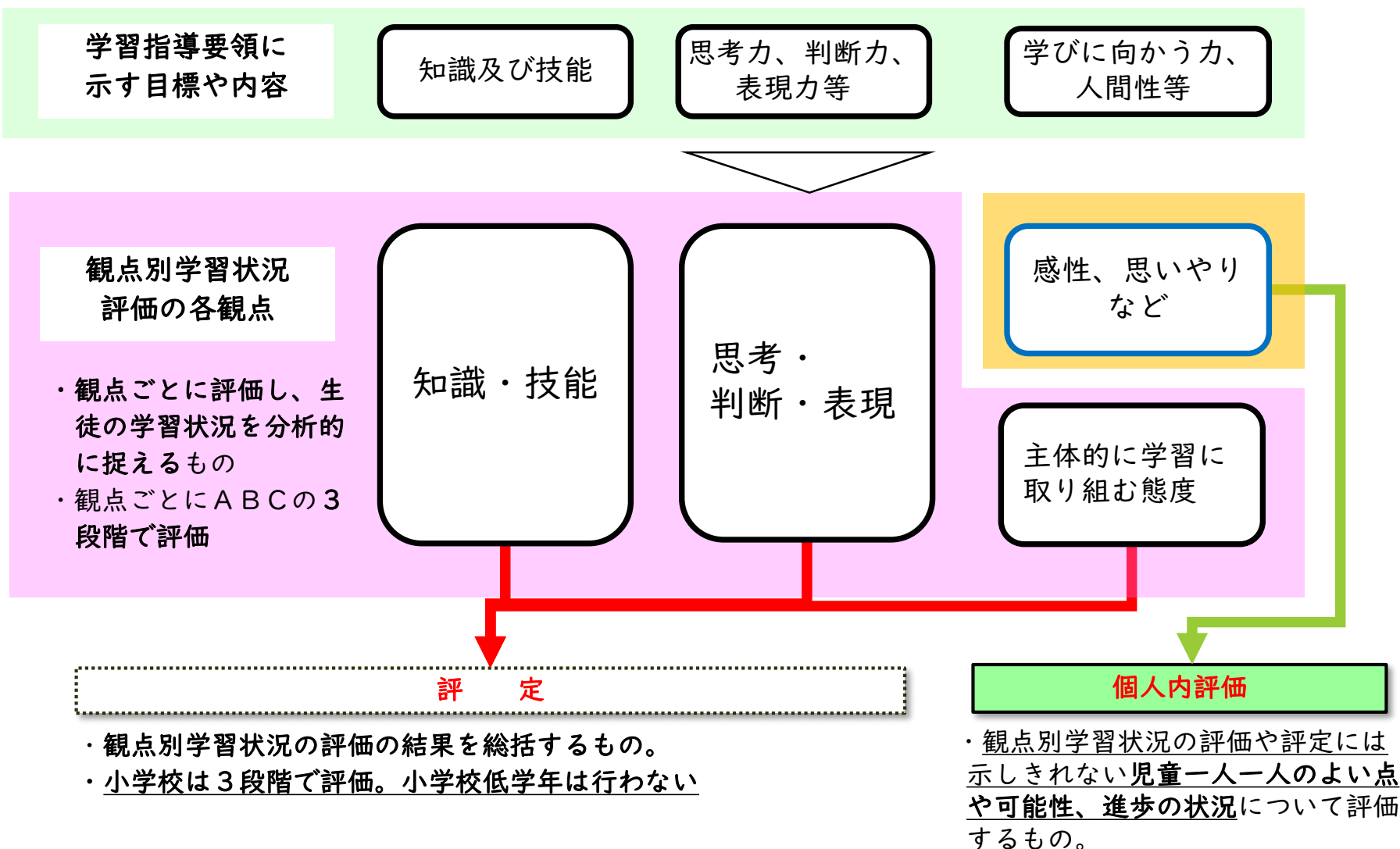
思考・判断・表現

主体的に学習に
取り組む態度

2、学習評価の基本構造

各教科における評価の基本構造

- ・各教科における評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況を評価するもの（目標準拠評価）
- ・したがって、目標準拠評価は、集団内での相対的な位置付けを評価するいわゆる相対評価とは異なる。



3、各教科等の学習評価

「知識・技能」の評価の方法

- 個別の知識及び技能の習得状況について評価する。
- それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、概念等として理解したり、技能を習得したりしているかについて評価する。

※上記の考え方は、従前の評価の観点である

- ・ 「知識・理解」（各教科等において習得すべき知識や重要な概念等を理解しているかを評価）
- ・ 「技能」（各教科等において習得すべき技能を見童が身に付けているかを評価）においても重視。

〈評価の工夫（例）〉

- ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮する。
- 実際に知識や技能を用いる場面を設ける。
 - ・ 見童に文章により説明をさせる。
 - ・ （各教科等の内容の特質に応じて）観察・実験をさせたり、式やグラフで表現させたりする。

3、各教科等の学習評価

「思考・判断・表現」の評価

各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価する。

※上記の考え方は、従前の評価の観点「思考・判断・表現」においても重視。

〈評価の工夫（例）〉

- 論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れる。
- ポートフォリオを活用する。

3、各教科等の学習評価

「主体的に学習に取り組む態度」の評価(1)

「学びに向かう力、人間性等」には、㊦主体的に学習に取り組む態度として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができると、㊩観点別学習状況の評価や評定にはなじまない部分がある。

学びに向かう力、人間性等

観点別学習状況の評価にはなじまない部分
(感性、思いやり等)



「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができると



個人内評価（児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するもの）等を通じて見取る。

※ 特に「感性や思いやり」など児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などについては、積極的に評価し児童に伝えることが重要。

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価する。

3、各教科等の学習評価

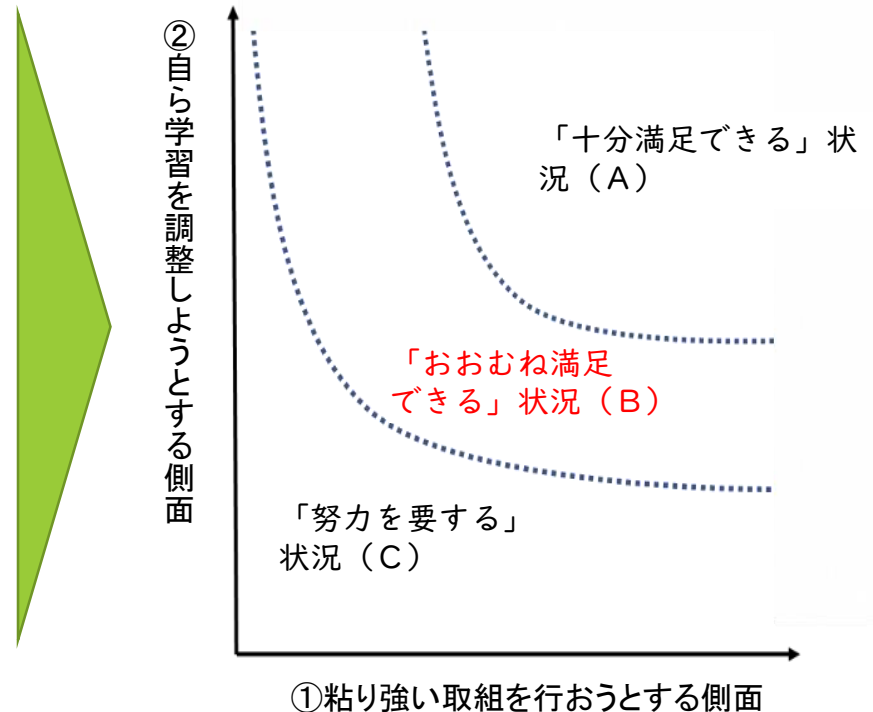
「主体的に学習に取り組む態度」の評価(2)

「主体的に学習に取り組む態度」については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、②自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価する。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面から評価することが求められる。

○これら①②の姿は別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。



3、各教科等の学習評価

「主体的に学習に取り組む態度」の評価(3)

<評価の工夫（例）>

- ノートやレポート等における記述
- 授業中の発言
- 教師による行動観察
- 児童による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いる

※ 「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で評価を行う。
(例えば、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではない。)

4、観点別学習状況の評価と評定

観点別学習状況の評価と評定

- 評定を引き続き指導要録上に位置付ける。
- 学習評価の結果の活用にあたっては、観点別学習状況の評価と、評定の双方の特長を踏まえつつ、その後の指導の改善等を図ることが重要。

評定：各教科等の観点別学習状況の評価の結果を捉え、教育課程全体における各教科の学習状況を把握することが可能なもの。



評定が観点別学習状況の評価を総括したものであることを示すため、指導要録の参考様式を改善

教科	観 点	学 年	1	2	3	4	5	6
国 語	知識・技能							
	思考・判断・表現							
	主体的に学習に取り組む態度							
	評定							

4、観点別学習状況の評価と評定

観点別学習状況の評価に係る記録の総括について

観点別学習状況の評価に係る記録が、観点ごとに複数ある場合の総括例

○A～Cの数を基に総括する場合

何回か行った評価結果のA、B、Cの数が多いものが、その観点の学習の実施状況を最もよく表現しているとする考え方に立つ総括の方法。

例えば、3回評価を行った結果「Aが1回、Bが2回」であれば「B」と総括することが考えられる。なお、4回評価を行った結果「Aが2回、Bが2回」だった際の総括結果を「A」とするか「B」とするかなど、同数の場合や「A」から「C」が混在する場合の総括の仕方をあらかじめ各学校において決めておく必要がある。

○A～Cを数値化して総括する場合

何回か行った評価結果のA、B、Cを、例えば「A=3、B=2、C=1」のように数値によって表し、合計したり平均したりする総括の方法。

例えば、総括の結果をBとする範囲を「 $2.5 \geq \text{平均値} \geq 1.5$ 」とすると、3回評価を行った結果「Aが1回、Bが2回」だった際の平均値は約2.3となり、「B」と総括することが考えられる。

4、観点別学習状況の評価と評定

観点別学習状況の評価の評定への総括

観点別学習状況の評価の評定への総括は、各観点の評価結果をA、B、Cの組合せ、又は、A、B、Cを数値で表したものに基づいて総括し、その結果を三段階で表します。

評定への総括について

A、B、Cの組合せから評定に総括する場合、各観点とも同じ評価が揃う場合は、「BBB」であれば「2」を基本としつつ、「AAA」であれば「3」、「CCC」であれば「1」とするのが適当であると考えられる。

それ以外の場合は、各観点のA、B、Cの数の組合せから適切に評定することができるようあらかじめ各学校において決めておく必要がある。

5、学習評価を行う上での各学校における留意事項

評価の方針等の児童との共有

学習評価の妥当性や信頼性を高めるとともに、児童自身に学習の見通しをもたせるため、学習評価の方針を事前に児童と共有する場面を必要に応じて設ける。

※児童の発達段階等を踏まえ、適切な工夫が求められる。

(例) 小学校低学年の児童に対しては、学習の「めあて」などのわかりやすい言葉で伝える。

観点別学習状況の評価を行う場面の精選

観点別学習状況の評価に係る記録は、毎回の授業ではなく、単元や題材などの内容や時間のまとまりごとに行うなど、評価場面を精選する。

※日々の授業における児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要。

学校全体としての組織的かつ計画的な取組

教師の勤務負担軽減を図りながら学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、学校全体としての組織的かつ計画的な取組を行うことが重要。

- (例)
- ・教師同士での評価規準や評価方法の検討、明確化
 - ・実践事例の蓄積・共有
 - ・評価結果の検討等を通じた教師の力量の向上
 - ・校内組織（学年会や教科等部会等）の活用

学習評価に関する参考資料

参考資料

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

令和2年3月国立教育政策研究所
小学校編……国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、課程、体育、外国語、総合的な学習の時間、特別活動
(<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html>)

小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）

平成31年3月29日 文部科学省
(https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1415169.htm)